

(二〇二三年度一般選抜C)

## 国語問題(六〇分)

(この問題冊子は表紙を除き十ページである。)

### 受験についての注意

- 一、 監督の指示があるまで、問題を開いてはならない。
- 二、 携帯電話・スマートフォンの電源は切ること。
- 三、 時計に組み込まれたアラーム機能、計算機能、辞書機能などを使用してはならない。
- 四、 試験開始前に、監督からが指示があったら、解答用紙の受験番号欄の番号が自分の受験番号かどうかを確認し、氏名を記入すること。
- 五、 解答用紙は三枚ある。解答は解答欄に記入し、その他の部分には何も書いてはならない。
- 六、 監督から試験開始の合図があったら、この問題の冊子が、右に記したページ数通りそろっているかどうか確かめること。
- 七、 筆記具は、H、F、HBの黒鉛筆またはシャープペンシルに限る。万年筆やボールペンなどを使用してはならない。訂正する場合は、消しゴムで丁寧に消すこと。消しくずはきれいに取り除くこと。
- 八、 解答用紙を折り曲げたり、破ったりしてはならない。
- 九、 試験時間中に退場してはならない。
- 十、 問題冊子と解答用紙を持ち帰ってはならない。

以下の文章を読み、設問に答えなさい。

二十世紀以降、つまり一九〇一年から現在にかけて、世界はこれまでにないスピードで変化しました。その変化のなかには、望ましい変化ばかりでなく、(一) 解決しなければならない新たな問題の発生も含まれています。多文化共生社会が当たり前になりつつありますが、他方で同じ共同体内で暮らす外国ルーツの人々や外国由来の文化などを否定し排除する言動が日本を含めて様々な国であらわれており、なかにはヘイトクライム(他者への偏見により暴力をふるったりすること)など深刻な状況に発展するものもあります。国家の内部でのこうした問題のほかに、国と国との間の経済格差や紛争など取り組むべき課題は多いのですが、それらは突然あらわれたわけではなく、過去の出来事に原因があるものが多いのです。ここでは、主に一九〇一年以降の世界を振り返りながら、現代の諸問題の根はどこにあるのか、どのように問題解決に取り組む必要があるのか、考えてみましょう。

NHKが制作したドキュメンタリー番組『映像の世紀』が最初に放送されたのは一九九五年のことでした。この番組は映像に歴史を語らせる、(あ)世界の出来事を当時の記録映像のみを用いて伝えようとするもので、全十一回にわたり二十世紀初頭から一九八九年の米ソ冷戦終結とその後までをカバーする異色のドキュメンタリーとなりました。学校の授業でもよく使われているようですので、視聴した人も多いことでしょう。このシリーズの初回で「二十世紀は動く映像として記録された最初の世紀である」と説明されたように、それまでは文字・絵画・写真などによる記録しかなかったところに、映像記録が加わったインパクトには大きなものがありました。『映像の世紀』の最終回では、日本に関する映像のみを集めています(NHK『映像の世紀 第十一集 JAPAN』。明治・大正期の日本の映像は、今日の日本で暮らす若い人々の目にはまるで見知らぬ異国のように映るかもしれません。服装も街並みも生活習慣も、現代とはまるで違って見えます。一九二〇年代、つまり今からおよそ百年前であれば、その当時生まれた人で長寿の方はまだご存命です。(い)赤ちゃんの時のことは記憶にないかもしれませんが、

一九二〇年代の世界について実際に目にしている当時の様子を語ることができる人々がまだおられる、それくらい近い過去のことなのに、この間の変化の激しさには驚きを覚えます。

この変化を、国際関係の変貌と科学技術の進歩の二つの面に分けて見ていきましょう。

まず第一に、国と国との関係が大きく変化しました。アジア、アフリカ、中南米などにおける植民地支配の（１）終焉、アメリカ合衆国とソヴィエト連邦による冷戦とその終結、その後のグローバル化（グローバリゼーション）の進展が主な出来事として挙げられます。十六世紀以降に植民地として支配されてきたアジア・アフリカ・中南米などから、第二次世界大戦終結後に百カ国以上の国々が独立を果たしました。これらの国々は、国際連盟に代わる新たな国際社会の枠組みとして第二次世界大戦終結後に発足した国際連合（国連）に主権国家として加盟していきます。同時に、第二次世界大戦後のアメリカ合衆国とソヴィエト連邦の対立による米ソ冷戦は、世界を西と東、（う）自由主義と共産主義の二つのグループにわけて対立する構造を作り出しました。朝鮮戦争やベトナム戦争などはこの冷戦がひきおこしたものです。強力な兵器の開発や宇宙開発などもこの時代に競うように進展しました。しかし、永遠に続くかと思われた冷戦も一九八九年にドイツを東西に分断するベルリンの（ア）かべが崩壊し、米ソ両国の首脳による冷戦終結宣言により幕を閉じました。なお、ソヴィエト連邦はその後、ロシア連邦へと名称が変わりました。

（え）、世界の国々の間に存在する経済格差や強国による間接的な支配の問題は依然として解決には至りませんでした。植民地支配を脱したのちも多くの国々は米ソ冷戦構造のもとで否応なくいずれかの陣営に所属することを求められ、朝鮮半島やベトナムのように戦火のため被害を受けた国々もあります。冷戦終結後には、国家内での民族間対立が（イ）さいねんし、さまざまな地域で紛争が引き起こされ、悲惨な結果をもたらしました。国連は加盟国により運営されますが、これは国際政治には国家単位でないと参与できないことを意味します。一つの国でも複数の民族、文化、宗教を内包することは多くあり、多数派による少数派の弾圧や両者の対立は二十世紀以前からの課題でした。この問題は植

民地支配や米ソ冷戦下でも不協和音を（ウ）かなでていたのですが、それぞれの体制下では抑え込まれて見えにくくなっていました。（三）それが冷戦後に各地で顕在化してしまった面があります。冷戦後に加速したグローバル化の動きが、こうした対立に拍車をかけました。

人や文化の国境を超えた移動を促進したのは、グローバル化の動きです。米ソ冷戦以降、欧米では複数の国で事業を展開する多国籍企業が急増しました。コカ・コーラ、ネスレ、マイクロソフトなどがそうした企業の代表です。これらの企業は複数の国に製造や販売などの活動拠点を持ち、ビジネスを展開します。そうすると人（労働者）・モノ（製品や原材料）・お金・情報などを、国境を越えて自由に動かすことが求められるようになります。東西の貿易や人々の移動の自由を妨げてきた冷戦が終結すると、これらの動きはさらに加速し、グローバル化が世界的な現象となりました。グローバル化はそれまでにない多様な製品や新しい文化を各国にもたらしましたが、同時に資源を有しながら他国に富を奪われる国や、安価な労働力として（2）搾取される国も出てくるなど、世界の国家間における経済格差、いわゆる南北問題などを生み出すことになります。経済的に恵まれない国々や、政治的に安定せず少数民族が迫害される国々から人々が安全な暮らしを求めて先進諸国に流入し、先進国ではそれらの人々を人道的な見地から難民として、あるいは労働力として受け入れるようになるのは必然でした。そしてこれがまた、国内の新たな民族間対立や差別の問題につながってしまうのです。

第二に、科学技術の変化があります。ここでは兵器開発、宇宙開発、コンピュータの開発とそれに伴う新たな情報ネットワークの構築を取り上げます。二つの世界大戦は戦争に使用される武器の性能を飛躍的に向上させ、その結果十九世紀までの戦争とは比べ物にならない膨大な死者を出しました。第一次世界大戦では戦闘機、戦車、機関銃、毒ガスなどが使用されました。第二次世界大戦では、ロケット攻撃や戦闘機による空襲が行われ、一般市民にも大量の死傷者を出しました。日本に対して使用された核兵器はとりわけ殺傷力の大きいものとして人々を震え上がらせたが、第二次世界大戦後の米ソ冷戦下では原爆から水爆へとさらに強力な兵器が開発され、危機感を持つ人々により核兵器廃絶を求める運動も起こされています。こうした兵器を戦略的に使うために、第一次世界大戦までは海、二次世界大戦では空を制するものが勝利を得る

として強大な戦艦や航続距離の長い戦闘機の開発が進められましたが、大戦後は宇宙空間へとその場がシフトし、宇宙開発競争が米ソで行われました。世界で最初の人工衛星スプートニクを打ち上げたのはソ連でしたが、アメリカが一九六九年にアポロ計画で月に有人探査船を送ることに成功し、宇宙開発競争を制した形になりました。現在では衛星軌道上は、天気予報、放送・通信、地上での位置計測のためのGPS、環境調査、軍事などさまざまな用途の人工衛星がひしめいており、隙間もないほどといわれています。（お）、アメリカ、ロシアなど複数国により運営されている宇宙ステーションもあり、日本の宇宙飛行士も交えてさまざまな実験や観測が行われています。

兵器や宇宙開発以上に（三）人々の生活に大きな影響を与えた変化とは、コンピュータの小型化と新たなネットワークの構築に伴う情報伝達手段の進歩です。人々に情報を伝達するメディアを支える技術は二十世紀に大きく変化しました。それ以前の状態を振り返ってみましょう。文字による記録文化を持つ地域の記録は、長いこと手書きにより支えられてきました。国王の命令書でも書物でも手で書く、あるいは書き写すことでしか記録は残せませんでしたし、識字率も現代にくらべるとはるかに低かったと考えられています。十五世紀にヨーロッパではグーテンベルクの印刷技術が登場して書物を一度に多く発行することが可能になりましたが、活字による印刷は準備に手間もかかり、一年間に出版される書籍の種類が一定レベルをこえて書籍文化が根付いたとされるのは十九世紀になってからです。新聞は世界に先駆けて十七世紀にドイツで発行されましたが、一般に普及するのはやはり十八から十九世紀といわれます。写真を掲載した新聞が登場するのは十九世紀後半のことでした。二十世紀にはいると情報伝達に関する技術革新が相次ぎます。有線による電信から無線通信が発明され、一九二〇年には最初のラジオ放送局がアメリカ合衆国にでき、音声での情報伝達が始まります。十九世紀から研究が進められていたテレビ放送も二十世紀に入ってから実用化されました。さらに、電子回路を利用して計算やデータ処理を自動で行うコンピュータも、二十世紀以降に真空管、トランジスタ、半導体と次々に部品の開発を重ねてより高速の計算ができるものが開発されました。さらにそれが小型化し、個人で使用する電子計算機を意味するパーソナルコンピュータ、略してパソコンが二十世紀後半に登場するのも自然な流れでした。さらにアメリカでは米ソ冷戦下で核攻撃による既存の通信網

がダウンしたときの(3)代替通信設備として、大型コンピュータ同士を回線で結び通信に使用するインターネットの原型の運用が一九六九年に始まり、二十世紀末にかけてパソコン同士を結ぶネットワーク上での情報のやり取りやインターネットサイトでの情報開示が一般化していきます。電話も二十世紀に普及したツールですが、有線式のいわゆる固定電話に始まり、個人使用の携帯電話が登場したかと思えば、音声通話だけでなく携帯用のコンピュータともいえる多様な機能を備えたスマートフォンが一九九六年に登場しますが、今では当たり前のよう一般に普及しています。

上に挙げたような国際政治の動向、グローバル化の進展や情報伝達方法の変化は、最初に述べたように、世界の文化や思想にも影響を与えていきます。飛行機による長距離移動が容易になり、人やモノの移動が容易になると他国の文化や思想などに触れる機会が増加します。ローカルな文化での流行もそれに影響を受けるようになり、多様な食文化や生活スタイルを楽しめるようになりますが、それと並行するように他国の人や文化を排除するナショナリズムが先鋭化することがあります。上記のように、もともとあった民族間抗争にくわえ、他国から流入する労働者への反発が加わります。さらに、これまでマイノリティとみなされてきた人々などが平等を求めて強く声を上げ始め、LGBTQ など多様な性自認や性的志向を求める運動が目立つようになると、従来の在り方にこだわる人々との(4)軋轢が生まれ、どこの国や地域でもこうした多様性を容認するかしないかをめぐり意見の相違や対立が見られるようになります。それまでの人々は所属する社会の文化的価値観に基づき、社会階層やライフスタイル、生活や行動規範を守るべきルールとして受け入れてきましたが、これに対する疑問の声が上げられた現在、単に「今までそうだったからこれからもそうであるべきだ」という見方が必ずしも正解とは言えなくなってきました。

多文化共生社会は、映画で有名になったフレーズのように人々が「あるがまま (Let it go)」に生きることを可能とする、選択肢がより多い社会でもあります。しかし、これまでの階層性や経済格差、男女格差、民族格差などを温存した社会のなかで既得権益を得ていた人々の中には多文化共生社会に不満を持つ人々も出てきます。(A) 多文化共生社会の登場と、それに対する反発は合わせ鏡のようにセットであらわれます。

このような反発を増幅した原因の一つに、インターネットサイトによる情報伝達があげられます。従来のマスメディアと異なり、多くの人々が自由に情報や意見を発信したり参照したりできるインターネットの普及は、自分が知りたい情報だけを（エ）けんさくし、それが手に入るとそれで満足してしまうために、視野が狭くなりがちであるという指摘もあります。見たい情報以外は見ないということは、自分が誤った情報に基づいて判断していてもそれに気づいて修正する機会がないという危険をはらんでいます。その結果、異文化の排除を掲げる人々が求める情報と、多文化共生社会の実現を志向する人々が求める情報の間に分断が生じ、それが地域共同体や国家間の対立に発展してしまう可能性さえあるのです。

国際社会における政治経済の変化はますます複雑化し、技術革新のスピードも増えています。高等教育機関で学んでいる学生や専門の研究機関で働いている人々でも、世界で何が起こっているのかを理解し説明することが難しくなってきました。例えば、それぞれの国の（オ）かへい 価値が変動することで多くの企業が影響を受け、末端の労働者は失業したり、あるいは物価の（5）高騰に苦しめられたりしますが、それにどう対処すればよいのか、答えは簡単には得られません。二〇二〇年以降に顕在化した新型コロナウイルス感染拡大問題は、グローバル化した世界の脆弱性を示しました。外から入ってくるウイルスに対する恐怖が、国外からくる人々、さらには海外ルーツの市民への差別や攻撃といった言動を激化させている面があります。互いに理解しあおうとせず、偏見による憎悪に基づき、相手に暴力をふるう社会は、誰もが安心して暮らすことができ、互いに差異があってもそれを尊重しあい認めあう理想の社会からはほど遠いものです。

（B）現代の社会が抱える問題は、上記のような過去から立ち上がってきています。一朝一夕のうちに生じたものではないため、根が深く、解決には多大な努力が求められることが容易に想像できます。しかし、私たちが結束して今、問題解決に取り組めば、すぐに解決するのは無理だとしても、いつかは世界を良いほうに変えていくことは不可能ではないはずです。そのためにも、一人ひとりが視野を広げ、自由に学べる機会を持つことが重要です。学びの機会は学校だけでなく、自宅にインターネットに接続できるパソコンが一台あれば得られます。アメリカや日

本をはじめ世界各地の高等教育機関の授業を自由に視聴することが可能だからです。見知らぬ他国の文化について、同じ学校や地域共同体で暮らす異なる文化やルーツを持つ人々と交流を持てば、その国に行かなくても様々なことが学べます。これから私たちが暮らす社会を暴力的な社会にするか、安心して互いに認めあつて暮らせる社会するかは、私たち自身の行動にかかっていると思うのです。

問一 (1) から (5) の読みを平仮名で書きなさい。(配点各一点)

問二 (ア) から (オ) を漢字に直しなさい。(配点各一点)

問三 (あ) から (お) に入る語として適切なものを次の中から選び、その記号を記しなさい。なお、同じ語が二度用いられることはないものとする。(配点各一点)

A また

B または

- C      しかし
- D      つまり
- E      もちろん

問四 傍線部(一) 解決しなければならない新たな問題 について、筆者の意見と異なるものを次の中から一つ選び、その記号を記しなさい。  
(配点五点)

- A      経済のグローバル化によって、国家間の経済格差が拡大した。
- B      米ソ冷戦が終結した後に、民族間の対立が噴出した。
- C      偏見に基づくヘイトクライムが、多文化共生社会をもたらした。
- D      インターネットの普及は、人々の視野を狭めるという逆効果を引き起こした。
- E      戦争は科学技術の発展を促進し、兵器の殺傷力は次第に大きくなった。

問五 傍線部(三) それが冷戦後に各地で顕在化してしまった について、その原因は何か、筆者の意見として最も適切なものを次の中から一つ選び、その記号を記しなさい。(配点五点)

- A 経済的に恵まれない国々で民族間対立が多かったため
- B 冷戦下では国内の民族対立はなかったが、冷戦終結後に新たに発生したため
- C 民族対立を抑えていた冷戦が終結したことに加え、グローバル化が進展したため
- D 国連には国家単位でしか参加できないので、少数派の意見が政策に反映されないため
- E グローバル化の進展により、多国籍企業の活動が活発になったため

問六 傍線部(三) 人々の生活に大きな影響を与えた変化 について、なぜ大きな影響を与えることになったのか、筆者の意見として最も適切

なものの中から一つ選び、その記号を記しなさい。(配点五点)

- A 学校での教育が普及し識字率が一挙に高められたため
- B 印刷技術の登場により大量に書物を発行できるようになったため
- C 多様なライフスタイルを認めない人々が出てきたため
- D 映像による記録は大きなインパクトを持ったため
- E 多くの情報を得られるが視野が狭くなる面もあり、分断を招きやすいため

問七 傍線部（A）多文化共生社会の登場と、それに対する反発は合わせ鏡のようにセットであらわれます。とはどのようなことか、六〇～七〇字で説明しなさい。（配点五点）

問八 傍線部（B）現代の社会が抱える問題は、上記のような過去から立ち上がってきています。について、まず（1）「現代の社会が抱える問題」とは何を意味するか、本文中の具体例を使い六〇～七〇字で説明しなさい。次に（2）「過去から立ち上がってきています」とは何を意味するか、本文中の具体例を使い六〇～七〇字で説明しなさい。最後に（3）、こうした筆者の意見に対するあなたの意見を、理由をあげ、六〇～七〇字で説明しなさい。（配点十五点）

以上